

名ばかりの各地編集委員となっていました。このたび編集後記を執筆する機会をいただきました。編集もしていないのにと思いつつも、せっかくの機会ですので思うところを書かせていただきたいと思います。

母校（大阪）の高校生がうちの大学（東京）にはるばる見学にやってくるという。今回初めて知ったが、オープンキャンパスに合わせて毎年、見学ツアーが組まれているらしい。どこからか素性がばれたようで、全く面識のない他専攻の先生から私にも見学会のお誘いがあった。模擬講義と称した研究紹介も行うとのこと。さて、どんな話をしましょうか。

物性物理の研究紹介はなかなか難しい。研究を正しく理解するには量子力学と統計力学という大学の後半で習う知識を必要とし、それらを5分や10分でわかった気にさせるのは至難の業だ。このような一般向けの講演の機会をしばしばいただくが、最近はあまり欲張って研究の話を入れられないようにしている。今回は大学を選ぶために来ている高校生が相手。ならば、最先端の研究紹介よりもこの大学で何を学べるかを話すべきではなかろうか。つまり、量子力学や統計力学を学ぶ意義を語るのが自然であろう。そう考えると、物性物理は実はネタに事欠かない。現代社会は量子力学と統計力学を必要とする現象であふれかえっている。オマケの研究の話として超伝導と光格子時計の話をいれてみる。質問は少なかったが、バイオセンサーの講演で寝ていた学生が目を輝かせて聞いてくれたのでよしとしよう。

それにしても、自分が大学を受験する時には地元を離れること考えもしなかったが、最近では東京に進学する人も増えてほしい。受け入れる側の立場から言うと、優秀な学生が遠方から受験しに来てくれるのは非常にありがたいが、個人的な意見としては、東京に人口集中してしまう日本の現状をどうにかしたい。願わくは、東大・京大を研究の大型拠点に、なんてことはせず、地方大学も同等に発展させて、東京外の地域で人材の入れ替えが起こるようになって欲しい。なんてことを考えつつ、来月、東京から地方大学へ異動します。

(YK)